

平成 26 年度せんぐう館企画展示

おんじょうぞくしんぽう げんりゅう  
**御装束神宝の源流**

こだい いしょう  
—古代の意匠—



開館時間 9 時～16 時半

休館日 4 月 28 日（火）

お問合せ 式年遷宮記念せんぐう館

〒516-0042

三重県伊勢市豊川町前野 126-1

TEL 0596-22-6263

<http://www.sengukan.jp/>

金銅装心葉形双鳳文杏葉

神宮徵古館藏

期間 平成 27 年  
3・25 [水] - 5・25 [月]



平成二十六年度企画展示

# 御装束神宝の源流

—古代の意匠—

## 企画展示によせて

第六十二回神宮式年遷宮に際して調進された御装束神宝は平安時代の文献『皇太神宮儀式帳』『止由氣宮儀式帳』『延喜式』に記載されて、名称・仕立・寸法・員数・調製に必要な材料などが定められています。しかし、その技法と意匠はすでに前時代の古式に則っています。

今回展示する古代の資料は、海外との交流によって日本にもたらされた先進の技法と意匠を導入して作られたものです。

それらは後世に継承されて残つたもの、また変容発展して消えたものもありますが、洗練されて現在の御装束神宝に至るまでの変遷がわかります。奇抜な造形と美、優れた技法をご鑑賞いただければ幸いです。

平成二十七年三月二十五日

## 目 次

企画展示によせて

目次

## 凡 例

- ・この図録は平成二十七年三月二十五日から五月二十五日にかけて式年遷宮記念せんぐう館において開催する企画展示「御装束神宝の源流—古代の意匠—」に際して作成したものである。

- ・図録の資料図版の順は、展示順序を示すものではない。
- ・展示資料の写真は当館が撮影した。
- ・本書の編集・執筆は芝本行亮があたつた。

- ① 金銅装棘葉形忍冬唐草文杏葉
- ② 金銅装心葉形双鳳文杏葉
- ③ 金銅装双龍環頭大刀
- ④ 金銅装頭椎大刀
- ⑤ 鉄地宝相華唐草文壺燈
- ⑥ 鉄地黒漆塗半舌燈

おわりに

主要参考文献



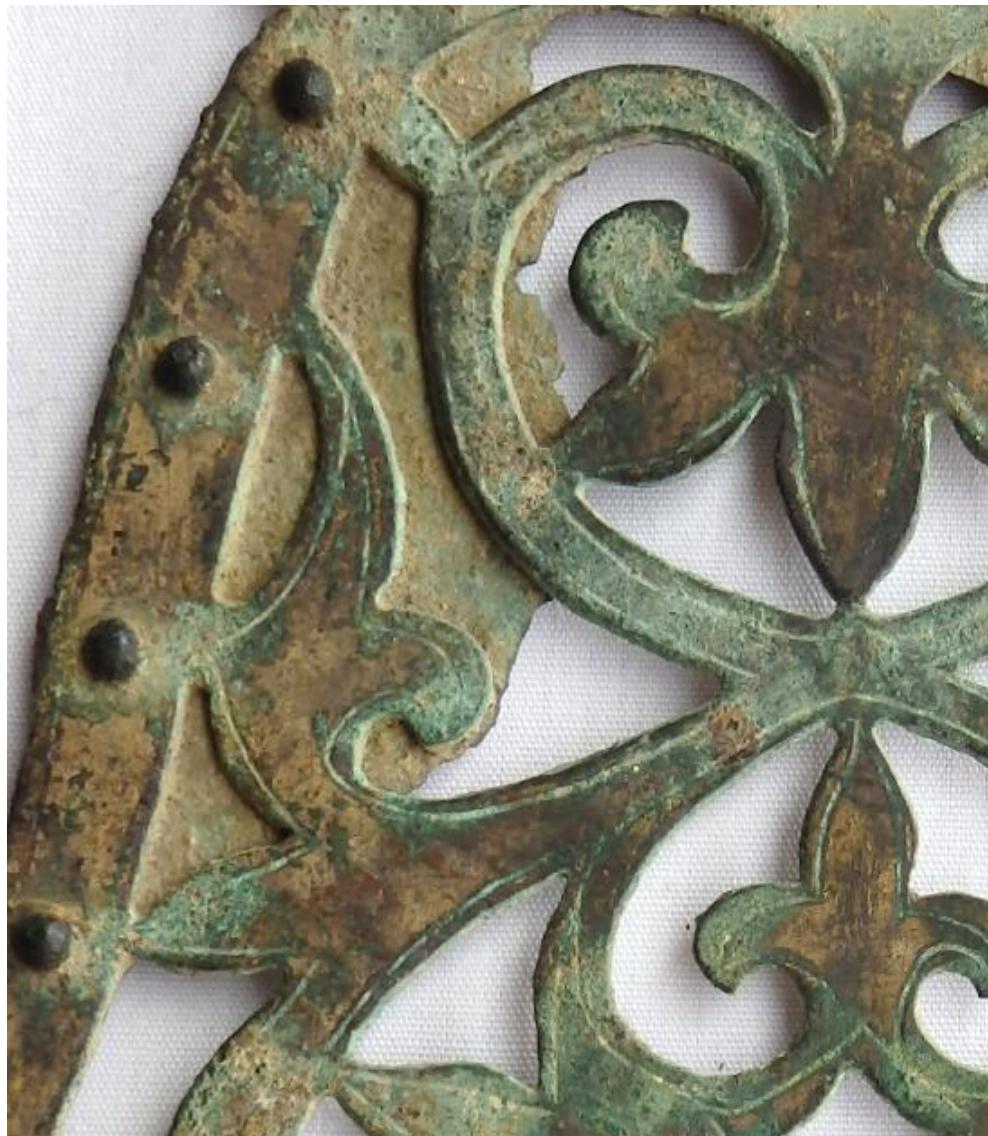
① 金銅裝棘葉形忍冬唐草文杏葉

神宮徵古館藏

古墳時代 6世紀第4四半期 (576~600)

出土地不詳

縦 16.3 cm 横 12.8 cm



金銅とは、銅の薄板を金色に装飾鍍金したものをさす。金銅製品は銅を加工して形づくる技術と、その表面を鍍金によって金色に装飾する技術を要する。古代の鍍金は金を水銀に溶かした金アマルガムを銅製品の表面に塗布して、その後に熱を加えて水銀を蒸発させて、銅製品の表面に金が残って金色にする金アマルガム鍍金法が用いられている。

本資料は鉄地金銅張製品となっている。鉄の地板に銅板をつけ、その上に文様板と縁金が一体となったものを被せて鉛留めして、金メッキ（金アマルガム鍍金）している。文様板は薄い銅板に文様を糸鋸で切り離し、忍冬唐草を毛彫り鑿による線彫りで文様に縁取りを施している。

杏葉は馬具の尻繫（鞍）・胸繫（鞅・当胸）にとりつけられた飾り金具。名称は形状が杏または銀杏の葉に似ることに由来する。

棘葉形は棘のある植物の葉の形をしたもので、6世紀前半に成立した新羅・伽耶に例がある。

忍冬唐草文は、パルメット文とも称して、橐櫛子の樹を図案化したもの。紀元前15～13世紀ごろ古代メソポタミア・アッシリア時代に使われて各地に広がった。

紀元前6世紀ごろにはギリシャで半パルメットと呼ばれる枝葉を波状に連ねた唐草文が考案され、西アジアからインドへ、あるいは南シベリア・モンゴリアなどを経て東アジアに伝わった。東アジアでは六朝時代（222年～589年）の石窟寺院などの装飾文、韓半島では三国時代から統一新羅時代（220年～676年）の古墳壁画などの装飾文として伝播した。我が国では忍冬唐草文と呼び、5世紀末から6世紀初頭に伝えられ、古墳・飛鳥時代の馬具や寺院の装飾に使われている。





② こんどうそうしんようけいそうほうもんぎょうよう  
金銅装心葉形双鳳文杏葉

神宮徵古館藏

古墳時代 6世紀第4四半期 (576~600)

出土地不詳

縦 7.0 cm 横 10.5 cm



心葉形は橢円形の一端を尖らせた猪目・ハート形をした植物の葉の形にしたもので、心葉形の杏葉には双鳳文があり、樹木の枝に留まった鳳凰が向かい合った姿で彫られている。文様は左右対称ではなく中心がずれており、1つの文様として雄雌一対の鳳凰を刻んでいる。鳳凰はくちばしを開き、鶴冠をたてて羽根を広げ、尾羽根を振り立てている。

この杏葉は鉄板を地板にして、その上に下地の銅板と鳳凰を透かし彫りした文様板を置き縁金を被せて鋤で留めた金銅製品となっている。本資料はその金銅製品の中敷である文様板にあたる。

文様板は、銅板に点打ちをして鳳凰文を転写して、糸鋸で切り離されている。鳳凰文は甲鋤鑿で透かし彫りされ、文様の周りを平鋤鑿で薄肉彫りして立体的に浮き出させて、更に毛彫り鑿で線彫りして鳳凰の羽根の軽さと広げる勢いを表現している。立体的になった鳳凰文には研炭で磨き上げられている。

毛彫り鑿による線彫り表現は晋(280年～420年)の出土品にあり、その後の南北朝時代の南朝(宋・齐・梁・陈)に普及した技術。日本では4世紀の大塚陵墓参考地(奈良県北葛城郡広陵町新山古墳)出土の金銅製帶金具に見られる。



③ こんどうそうそうりゅうかんとうたち  
**金銅装双龍環頭大刀**

神宮徵古館蔵

古墳時代 6世紀第4四半期 (576~600)

明治7年(1874)群馬県高崎市八幡町(碓氷郡八幡村)出土

古河虎之助旧藏

長 89.0 cm 柄頭径 7.8 cm 谏徑 6.7 cm



環頭とは柄頭に環状の装飾がある古墳時代の刀装形式の一つ。漢代に発達した魏・晋代以降の意匠で、高句麗を経て日本に伝えられた。環頭大刀は「高麗劍」とも言われ、柄頭に環がついていることから「わ」にかかる枕詞として『万葉集』199番に詠われている。

環頭は鋳造で形作られた後に鑿で仕上げ加工されているが、量産型で省略化が進んでいる。環状の柄頭の中には双龍文があり、二匹の龍が向かい合って一つの玉を咥えており、龍文には「U」文鑿で鱗を表現している。柄間には蕨手唐草文を施した金銅板が巻かれている。鐔は平面長楕円形で八窓の透鐔。足金具の一ノ足・二ノ足が付いており、大刀の佩用は二足佩用の横佩き。足間・鞘間飾板は二列珠文の金銅板が巻かれており、鞘尻は丸尻になっている。古墳時代の直刀を「大刀」と記し、平安時代以降の反りをもたせた弯刀を「太刀」と表記する。



④ 金銅裝頭椎大刀

神宮徵古館蔵

古墳時代 7世紀第1四半期 (601~625)

群馬県高崎市八幡町（碓氷郡八幡村）出土 古河虎之助旧蔵

長 115.8 cm 柄頭径 8.0 cm 鐔径 9.0 cm

頭椎とは柄頭に拳状のふくらみがある古墳時代の刀装形式の一つ。

『古事記』天孫降臨の段に「頭椎之大刀」と書かれ、

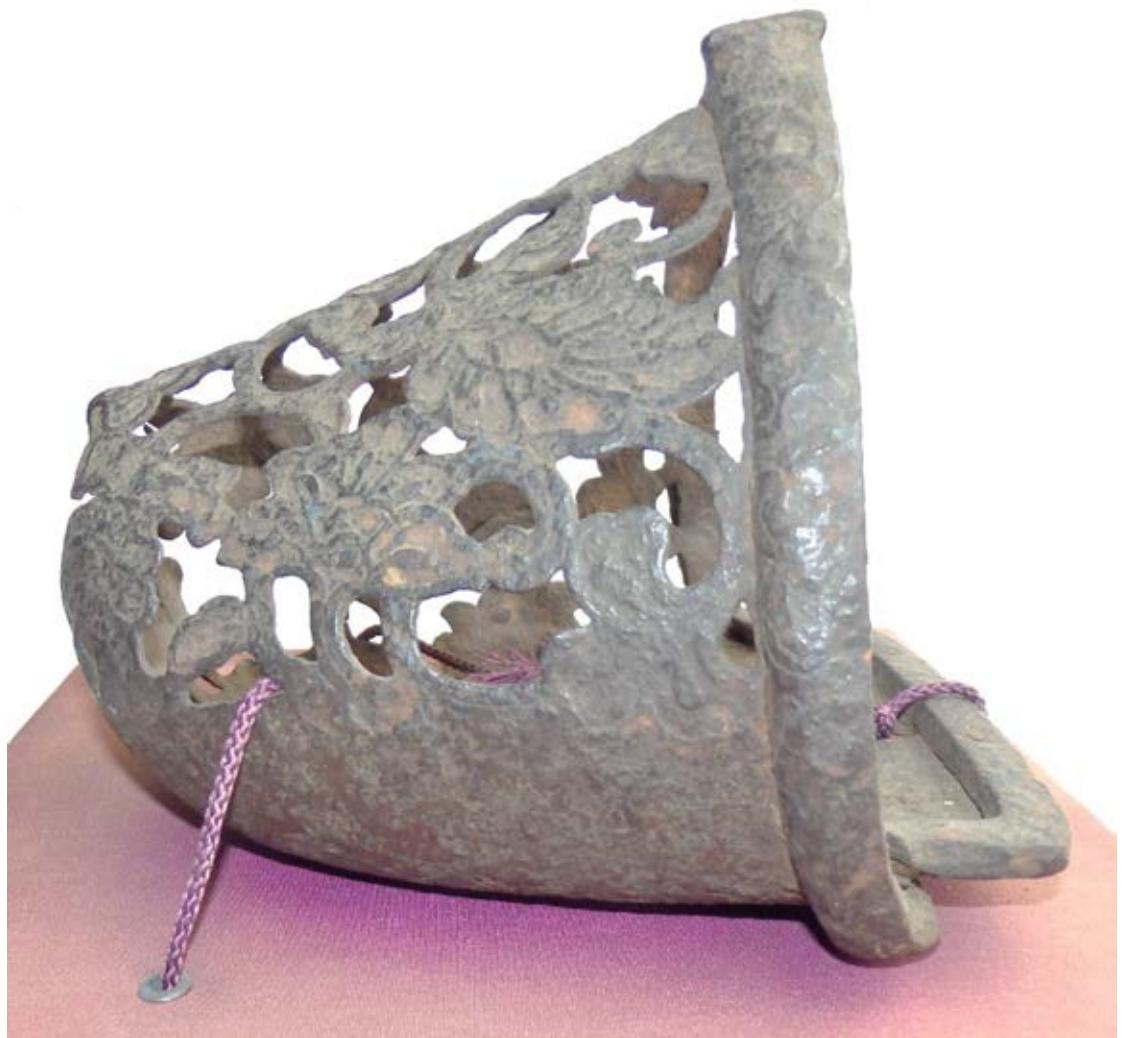
『日本書紀』には「頭槌、此には箇歩豆智と云う」と読みが記されている。

古墳時代中期（5世紀）の布留遺跡三島（里中）地区（奈良県天理市）より頭椎状の柄頭がついた木製刀装具が出土している。

本資料は柄頭の表面にはわずかなくぼみによる畦目が堅になっている「堅畦目式柄頭」になっており、懸通孔がある。柄間には、巻かれた金銅板が欠損しているが、蕨手唐草文を打ち込んだ痕が見られる。鐔は平面縦長楕円形。6つの円形残して周りを切り抜いているため、透かし窓が六窓ある「六窓透鐔」となっている。足金物の一ノ足が欠損しているが、二ノ足の金物が残存しており、大刀の佩用は二足佩用による横佩き。



大刀の佩用については、『日本書紀』敏達天皇14年（585）、敏達天皇の大喪に際して、蘇我馬子が大刀を佩いて誄（吊辞）を述べていると、物部守屋がその様を「獵矢で射られた雀のようだ」と揶揄する場面がある。大刀を二足で吊り下げて横に佩くという新しい佩用スタイルが守屋には奇妙で滑稽に見えたことを示している。蘇我馬子の横佩きスタイルは隋様式の儀仗用大刀の影響が窺える。大刀は奈良時代に入ると唐様式の「唐大刀」が作られ、平安時代に儀仗用の飾大刀が制式となる。



⑤ 鉄地宝相華唐草文壺燈

神宮徵古館藏

平安時代前期（784～902）

熊本藩士木原盾臣・江藤正澄旧藏

縦 15.8 cm 横 15.0 cm 高 15.0 cm



鎧  
鑑  
は  
鐵の  
鍛造品が  
使われ、  
沓込の表面に  
宝相華唐草文を  
透かし彫りし、  
僅かながら  
金象嵌の  
痕が見られる。  
沓込長さ  
12.7 cm、  
沓込幅  
15.1 cm、  
沓込高  
12.1 cm、  
舌長さ  
3 cm、  
舌幅  
12.1  
cm。沓込も舌も短く作られており、製作年代が平安時代前期に推定される。宝相華唐草文は  
インドに発した花文様で、東アジアに入るにつれ、しだいに想像性豊かな意匠に作り上げられた。





## ⑥ 鉄地黒漆塗半舌鑑

神宮徵古館蔵

平安時代中期（902～1019）

手向山神社旧蔵・江藤正澄旧蔵

縦 21.0 センチ 横 15.0 センチ 高 28.5 センチ

鑑は鉄製で黒漆塗りの無文。壺の沓込が深く、短い舌を付けた半舌となっている。古墳時代から奈良時代にかけて使われた壺鑑と鎌倉時代に主流になる舌長鑑の中間の過渡期の形態を示す「半舌鑑」。奈良時代末期より壺鑑に短い舌がついて、平安前期・中期と次第に舌が長くなり、「舌長鑑」となる。沓先の鳩胸を高く張って、沓込の縁が「し」字状をなし、縁が鑑の頭頂部に達して、鑑と鑑軸を連結する釣具がある。鞍と連結する鑑軸は五段の長円形の鑑を二つ折りにしたものを作った兵具鎖となっている。沓込長さ 15.1 cm、沓込幅 15.1 cm、沓込高 12.1 cm、舌長さ 9.0 cm、舌幅 10.6 cm、鎖形の長さ 15.8 cm、鎖形の幅 3.9 cm。壺鑑から舌長鑑へ移行する形態が見られることから、平安時代中期の製作と思われる。

## おわりに—御装束神宝に見られる日本人の気質—

本企画展で展示した古代の資料と第三・第四展示室の御装束神宝調製工程品を見くらべると日本人の気質である伝統を維持しながら、それに満足せず、更に新しい技法・意匠を見出して発展させていく様が見られます。

遷御後に御神楽の儀を復興して行われた明治二十二年（第五十六回）式年遷宮では「其の器用・礼典皆古儀に拠り、定めて正式と為す」（『明治天皇紀』明治二十二年十月一百条）と記されています。その一節が示すように祭儀においては古儀を基にして、その度ごとに相応しくしてそれを「正式」として執り行っています。

今次の第六十二回式年遷宮で奉獻された御装束神宝は平安時代に定められていますが、前時代である古墳・飛鳥・奈良時代に培われた技術・意匠を基にしています。しかし、単に前時代の古いものを模倣し、従来通り作っていくのではなく、その都度、工芸の粹をきわめて、巧みを尽くして相応しい姿に調整して奉獻されています。

それら技法と意匠は早くも古墳・飛鳥時代に日本様式の頭椎大刀を隋・唐様式に二足佩用による横佩きに改良するかのような創意のひらめきを示す斬新さを披露します。いかにも先進の良いものを一刻も早く取り入れたいと願う日本人の気持ちが伝わってきます。そのため、技法と意匠は次々と国内で開発され、日進月歩の展開を見せていきます。

平安時代には遣唐使の廃止によって、国風化が顕著になり忽然とその技法と意匠が変容発展して日本独自の創作路線に進みます。遣唐使廃止から『延喜式』成立に至るわずか三十年ほどの歴史のなかで、日本の古式を伝統として保持しつつ、他国に学んで改良して捧げるに相応しい御装束神宝が「正式」に定められます。神々に捧げられる御太刀・御鞍・御彫馬などは、他国の匂いを消し去って、もうどこから見ても「日本の美」としか言いようのない姿をしており、日本の美術・工芸上のひとつの頂点に位置するのが御装束神宝と言えます。

## 主要参考文献

- 鈴木勉『ものづくりと日本文化』平成 16 年 6 月、橿原考古学研究所附属博物館友史会  
『藤ノ木古墳とその時代展』平成元年 10 月、(財) NHK サービスセンター  
山本忠尚『日本の美術 第 358 号 唐草紋』、平成 8 年 3 月、至文堂  
『仁徳陵古墳築造の時代』平成 8 年 4 月、大阪府立近つ飛鳥博物館  
『黄金に魅せられた倭人たち』平成 8 年 9 月、島根県立八雲立つ風土記の丘  
『金の大刀と銀の大刀—古墳・飛鳥の貴人と階層—』平成 8 年 10 月 大阪府立近つ飛鳥博物館  
『大化の薄葬令古墳のおわり』平成 10 年 10 月、大阪府立近つ飛鳥資料館  
『日本書紀』2 平成 9 年 7 月、小学館  
『日本書紀』3 平成 10 年 6 月、小学館  
『延喜式 伊勢神宮・斎宮』昭和 3 年 2 月、神宮司庁  
『神宮徵古館陳列品図録』昭和 16 年 1 月、神宮徵古館農業館  
『神宮神宝図録』平成 21 年 6 月、神宮徵古館農業館  
阪本廣太郎『神宮祭祀概説』神宮教養叢書第 7 集、平成 18 年 8 月、神宮司庁  
胡麻鶴醇之「戦前三代の式年遷宮」(『神宮・明治百年史』上巻、昭和 62 年 9 月、神宮司庁)  
村瀬美樹「御装束神宝の古儀調査を中心として」(『神宮・明治百年史』上巻、神宮司庁)  
奥西道浩「神宮の御造営」(『第六十二回神宮式年遷宮』平成 26 年 3 月、神宮司庁)  
熊谷泰「御装束神宝の調進」(『第六十二回神宮式年遷宮』平成 26 年 3 月、神宮司庁)

## 平成 26 年度企画展示

御装束神宝の源流—古代の意匠—

編集・発行 式年遷記念せんぐう館

〒516-0042

三重県伊勢市豊川町前野 126-1

Tel 0596-22-6263

無断の複製・転載を禁じます。

